こしやの光

魔事の巻

目次

魔事を示す……一
死性観……五
天然と霊性……一四
人性の目的……一七
精神三階……二〇
宗教心の発達……二二
精神の三面……二三
心霊の覚醒……二五
名号のときわけとすゝめ……二九
信仰すゝめ……二九
念佛大事を伝授の状……三二
弘法大師……三三
佛説阿彌陀経開題……三九
宗教の意義……四〇
宗教的関係……四一

魔事を示す

魔事とは、行者三昧を修する時、或は内心不調の爲め、安心豫備不完全の爲め、または生理的に腦髓の錯覺妄覺幻覺等の起り易きあり。爲めに精神に異狀を起して、之を三昧中の魔事と爲す、また業相と名づく。信論に或は衆生ありて善根の力なく、諸魔外道鬼神の爲に惑亂せらると。

若しくは坐中に於て形を現じ恐怖し、或は端正の男女等の相を現はす。或は天の菩薩の像、亦如來像を作し、相好具足し、若しくは陀羅尼を說き、乃至、無因無果、畢竟空寂是眞涅槃なりと說き、或は人をして宿命過去の事を知り、亦未來の事を知らし、他心智、辨才無碍を得せしめ、能く衆生をして世間名利の事を貪著せしむ。又人をして數瞋、數〻喜んで性常準なからしむ。或は多慈愛多睡多（　）多病にして、其心懈怠ならしむ。或は率に精進を起し、後便ち休廢し、不信を生じ、多疑多慮、或

は本の勝行を捨て、更に雜業を修す。若し世事に着し、種々に牽纏、亦能く人をして諸〻の三昧の少分の相似を得しむ。皆是外道の所得にして、眞の三昧に非ず。記に曰く、若し魔の所作を是善相と謂つて、心に執着せば則ち邪網に墮す。若し實に是善根所發の境を魔事と爲と謂つて、心に疑うて、捨離せば、則ち善根を退失して終に進趣なし。是故に邪正實に別を取りがたし。今且く古德の相傳に依り略して三法を以て、之を驗む。一に定を以て研磨し、二に本に依りて修治し、三に智慧觀察す。經に言ふが如し、眞金を知らんと欲せば、三法を以て之を試みよ。謂く燒と打と磨となり行人亦爾り、別識り難し。若し之を別たんと欲せば亦三驗を須ひよ。一には則ち當に與に共事すべし。共事して知らずんば當に久處すべし。久處して知らずんば、智慧觀察せよ。今即ち此意を借りて以て邪正を驗す。謂はく定中に境相發する時、邪正知り難き如きは、當に深く定に入りて、心に彼境中に於て取せず、捨せず、但平等定に住すべし。若し是れ善根の所發ならば、定力逾々深く善根彌々發す。若し是れ魔の所爲ならば、久しからずして自壞せん。第二に、本に依りて修治することは、且く本不淨觀禪を修するに、今則ち本に依りて不淨觀を修す。若し是の如く修せんに、境界增々明ならば、則ち僞に非ず。若し本を以て修治せんに漸々に壞滅せば、當に知るべし、是れ邪なり。第三に智慧觀察は所發の相を觀じ、根源を推驗するに生處を見す。深く空寂と知りて心に住着せずんば、邪は自ら滅すべし。正は當に自ら現ずべし。眞金を燒いて其光色を益すが如し。若し是れ僞金なれば即當に焦壞すべし。此中の眞僞當に知るべし。亦然り。定は磨するに喩ふ。本治は猶ほ打つが如し。智慧觀察は之を類するに燒を以てす。此の三驗を以て邪正知ることを得べしと。應に知るべし。外道所有の三昧は、皆、見愛我慢の心を離れず。世間の名利恭敬を貪著するが故に。』

要するに三昧に入りて啓示を期すること、宗教的關係を結合し、鞏固なる信念を獲る爲に、正しく恩寵獲得、神人合一の眞を實驗するにあり。最も眞面目に、最も

至誠に凝神摧勵するにあらざればうべからず。

若し僅かに光耀を感ずる如きの場合には、堅固にあらざる時は僅かに光耀を感ずる如きに際して、動轉狂噪して、眞摯なる信心を狂はす。最も愼重すべし。

啓示は自己が解脱を得べき靈的生活過程の光明なれば、全く自己の救濟に對する恩寵なり、之を却つて名聞憍慢の材料の如くにせば、忽ち煩惱魔の爲に心靈撓亂せられん。魔事といひ、業相といひ、三昧修養の不調整より惹起すべき心的現象なり。

三昧寶王論に曰く、問、魔光佛光、自觀他觀、邪正混雜す。願はくば一々之を示せ。對。人想に依りて即ち現ずるを自と云ひ、正と云ひ、想に依らずして現ずるを他と曰ひ、邪と曰ふ。謂はく本自意を想ふに自毫現せざる如き、其本心に乖く。況んや諸想をや。又魔光は影の眼を耀かす有り。佛光は影の眼を耀かすなし。楞伽に云く、照耀盛火の如く、光明悉く徧至、熾炎目を壞せず、又眞光は念佛の人の身心を澄渟清淨ならしむ。僞光は念佛の人をして躁動恍惚せしむ。涅槃に澄渟清淨即ち眞の解脱（斷絶）

死生及靈魂觀

小乘佛教死生觀

小乘佛教では何れも生死の體なる我を否定して無我を認む。五蘊即ち身と意との蘊微細意識が前世より後世に相續する。小乘有部の俱舍論に、衆生生死相續の狀態を四有とす。一、本有。（生より死に至る。）二、死有。（將に死せんとする一刹那。）三、中有（死して未だ生せざる間。）四、生有（將に生れんとする。）

此五蘊和合の生より死に至るまで、死して中有の五蘊は微細にして見るべからず。（香を以て名とす。）四十九日業力に隨つて母胎に宿る。之をカララと云ふ。形體具へて母胎を出づ。生死輪廻の十二因緣を以て說く。十二因緣とは、

初め、無明、即ち煩惱である。煩惱衝動力

二、行。善惡の行に依（ ）

識。業。小乘有部の說、羯磨即ち業のみ相續する。我心と身と共に生滅す。雜阿含に、諸の所有の色、若しは過去、若しは未來、若しは現在、若しは內、若しは外、若しは麁、若しは細、若しは好、若しは醜、若しは遠、若しは近、當に觀ずべし、彼の一切は皆是死の法なり。受と想と行と識と亦復是の如しと。此身と共に意識も竟に消滅す。心身共に消滅せば死後業は如何にして相續するや。依つて中有の五蘊又細意識を有すと云も未だ不了を免れぬ。大乘唯識に於いて、此意識の上に末那、阿賴耶の二識を立て、一切の心意識を八識とし、其本源を阿賴耶とす。是藏の義にして、藏に一切の物を藏む如く、諸法の種子を包藏す。末那が自己阿賴耶を我と分別す。

意識と共に業を相續するものは阿賴耶（ ）一代造りし善惡の業は、身と意識とは亡びても、行爲の結果は阿賴耶業識に業種子とし、末那の作用が結果を招くべき爲に筱め込勢力を名言種子と名づく。斯等の種子が阿賴耶の本體內に伏藏、之が因種と爲りて、機緣を待つて、又新なる身體を構成す。而して其業なる物は物心已外の存在ではない。識即ち心的作用の一種に過ぎぬ。一切の業種子は悉く阿賴耶の伏能にして、六道種々の身を受く。個々の根本は阿賴耶、種子持續の體である。此種子から芽發して七識の現行となり、七識現行が亦阿賴耶の種子と爲り種子が現行を生じ、現行は種子を薰じ、轉展極りなく、生死の身を受く。此阿賴耶は解脱するにあらざれば業力を以て生死極りなし。

物質不滅勢力保存、吾人の肉は物質、精神は一種の力、彼の不滅を許して此を許さざるを得んや。

感情は常に死後の或物を求む。

死に對する感想に三、

一、死は人生の煩累を脱する樂事と思惟する者、莊子列子。

二、未來の生活を憧憬する者

三、死生一如と觀ずる者

歸趣、天國は性を遂げて己を盡すべきを盡したる人の達する處。

八

ヴント

ヴントの、科學は宇宙の研究に過ぎず。哲學は部分統一知識。我等が主觀外の客觀物は主觀の幻影に過ぎずと云ふに非ず。此現象界は客觀的實體の顯現に（う）る。此現象中に實在の本體を求むることを得べし。其本體とは物にも心にも非ざるか、否本體とは即ち意なり。本體は複雜なる情緒を有する意の顯現なり。（理知を伴ふ）意志なり。一切の現象界は即ち銘々異れる意志の顯現なり。最高の本體は哲學的に之を定むるは稍困難なるも、宗教的信仰を以て之に對すれば、宇宙の最高本體は無限の活動を爲し、微妙なる働を成就せんとして努力する絶對意志と信ず。心靈的本體此に於てか成就す。

マイヤー

マイヤースは靈魂及び未來に、事物の心理的方面の洞觀な（く）一種の光明を以て人生の表裏を見ること無から（ず）ば、眞理の海の傍に、人の中心に存する精靈は、器官脱離し自由を愛樂し、未だ肉を有する精靈と肉なき精靈とを結合す。如是にして一切の知識は發達すと。

他世界個體靈魂の不滅、幽冥界と肉體との交通を稱道して已まず。

メチニコフ

メチニコフは細菌學者、彼思へらく、人間の性慾不（　）の機器本能の矛盾は時として疾病を釀し死亡の原因となる。宗教の靈魂不滅は今日の科學を以ては證明が出來ぬ科學知識と矛盾する故、宗教や哲學にて迚も死の畏怖を慰むることは出來ぬ。科學の進歩は少くとも現代より老衰を遲くし長命を保つを得べし。人間は或限度に長壽を保てば自然に死す。彼の蟻の一種が暫く食ひて直に食慾無くなり數時間にて生殖を行ひ直に死滅する。人類も極度に其生命を保つ時は自然に死に至る。生活の慾を去らば喜んで死するを得べし。人類の進歩の目的は一切の疾病と有（　）とを除きて自然的死に

九

至るまで長壽せしむるにあり。此に至らしむる唯一の道は科學あるのみと。

一〇

トルストイ

トルストイは、吾人の生命は一切これ夢である。地上の生命は一層眞なる夢、最眞實なる生命を追求する時は終に神に達す。眞實なる生命は神の生命のみなり。死は現在の夢より醒めたので、死は精神の自由放釋。肉體は自由を障碍す。眞實の生命は此障碍除かれて始めて發展の途に着かんとす。死は精神放釋に自由を恢復すると共に、眞生命の曙光ここに初めて光明を放つ。

靈魂の有無

個性靈の斷滅と存續と二つに、斷滅說は死を以て終局とす。斷滅に一切皆空と雖も形體の死と共に滅するに非ず。空とは精神的の或物を指す。故に死後何等かの存續を許容す。唯個性の未來存續を否定するのみ。

個性存續中に死後靈魂形質ありと、形質なしと二說

- 靈魂
  - 有
    - 形質あり
      - 現世に等しき、
      - 細身（エーテル的微細の質）
    - 形質なきも知覺あり、
  - 無
    - 一切皆空、
    - 個性的靈魂なし、

- 靈魂歸趣
  - 魂魄離散說、（儒教）
  - 羽化登仙說、（仙家）
  - 輪廻轉生說、（印度埃及）
  - 天國地獄、（基教回教）

アウグスチヌス

羅馬加特力教。

父なる神と子なる神とは其性同一ならざれども相等し、且聖靈も是と等しと云へる

一一

三位一體論、基督は純然なる神なると共に全然人、基督神人論、及び人間は生來罪に汚れたる者にして自ら救ふこと能はざれども唯神の慈悲を以て救はる人間論。

聖アウグスティヌス出で第三人間論は彌々明となりぬ。彼は思へらく、人類の祖アダムが自由意志を以て罪惡を犯せるに由り、其子孫たる吾人は其原罪の爲に皆罪を犯すべき性を享けて、之に汚れ終に意志の自由を失ひ、罪を犯さざるを得ざる態に陷りぬ。然れども神は慈悲を以て人間を救はんと、神は基督を以て人類の罪を神に贖はんが爲めに世に出でて死す(に償)。此神の子の出世なからんか、何人と雖も神に救濟さるるを得ず。而して地上に於て、基督救濟の事業を繼續するものは教會である。故に教會はキリストの代表者の教會以外、道を求むべき處なし。彼は救濟の中心を教會に置く。又一面には吾人が意識中にある我の存在の確實なるを認め、一切經驗の究竟は吾人の意識に求めざるべからず。彼一面には吾人已外の教會の救ふ所に、又一方吾人各自の實證する處を基本として神を信ずべしと。

マホメット

マホメット。天國は樂むべし地獄は惡むべし。善と惡とは必ず報償あり。七重の地獄を立て罪の輕重に基き其甚しき猛火炎々の中に投せらる。飲むべき水は火の如く食すべきは枯燥せる荊棘のみと。

天國に七重あり、凉風往來、綠葉濃花の如き美女側に侍り、噴水は所々に玉を吐く樂園、身命を賭して神の爲に盡す者此處に至る。

ルーテル

ルーテル、病革る「我心靈をば汝の御手に納め給へ、此肉體を離るとも我永久に神と偕にあらん」と祈る。

約翰傳「神は其獨り子を賜ふほどに世の人を愛し給へり。こはすべて彼を信ずる者に亡ぶることなくして永生を受けしめんが爲なり。」

天性と靈性

天性即ち人、自我は、生物の進化したる精神的生物である。

性格は歴史的に規定せられて生物原始以來の遺傳的決定なれば進み〳〵て人間として、遺傳の性質を第一元因とし後天的に家庭、社會、四圍の風俗、習慣、時代思潮等の一切の歴緣對境が助緣と成りて第二の性質を定む。是れ天然の人々が因緣に約束せられて自ら自己の性質と習慣性とは自から移すこと能はざるなり。又天性は之が野卑であり、不靈であると自覺すること能はざるのである。故に彼は生れつきに限定せられ、四圍の境に約束せられて自ら之を解く事は出來ぬ。人の天性は人力の及ばざる處と自任して居る。是因緣に約束せられて自由を得ざるが凡夫の常である。之を或は天命、或は天に出づ。或は因緣上止むを得ざるものとしてゐる。

人には靈性の伏する在り。靈性は理性が窮(　)の極に、迚も人力が如何ともする能はず、自力の及ばざる奥底に潜める靈性が閃然として光を放つ時に當つて始めて發揮す。此の伏靈は絶對絶命の時には閃きを放つ。天然性の殺さるゝに臨み還て活く。人順境に又得意の際には、私慾の意に欺れて、靈性は却つて私情に魅せられて、其の影を潜むることあり。若し逆境失意に會して却て、靈性は非常な力を揮ひ、又如何なる艱難の時にも安樂を見出し、人界以上の天國を發見し、又一と度靈性の發揮するあれば、縱令人的性格は墮落の淵に墜つるも、靈性の光は、禁ずる能はざるを覺ゆ。

自己の罪惡を悔い、良心呵責の苦悶を要する時、心靈が天性の自己を呵責するなり。

人の理性は、之れ天性の意志が煩悶の奴隷と成り、煩惱魔は自己の人格を倒さざれば止まざるなり。恁る時も自己の情意は自暴自棄となり、何もする能はず。恁る場合にも潜める心靈性には、如來の光明は心靈の奥底より發射して、内心を衝き、盲情の闇の中にも、肉慾の淵に溺れても、内心警告の心靈に救濟の光は失はぬ。

斯心靈は大靈の光を呼ぶの窓なり。自己の心靈と大靈の光と聯絡なき人格意志、自

ら自己を救濟する事は不可能である。吾人が感覺は、色聲香味觸の五塵に汚されざる靈の光に依つて、心靈を通じて、吾人の五塵に穢れたる處を洗濯するなり。吾人が感覺又吾人の感情は唯だ自己の肉の幸福のみを欲望し、却て不幸を感じて常に苦惱を感ずることが多い。然るに心靈は大靈の無限の靈福を享受すべし。

人生は個人的でなく、人類相互に不可割關聯し、同一生命の大靈の分子が、種々無數に別れたる個々である故、唯だ形氣の質については特殊的なれども、其の奥底の心靈について一致する故に、唯だ形氣の私心のみに偏する人は、自分勝手、氣儘なることが免れぬけれども、然れども靈性を有する限りに於て、相互の間に親密にして、彼我一體の觀あらしむる心情を有つてゐる。夫れが人類道德心の最も貴重なる仁愛である。仁愛と親子間の愛慾又男女間の戀情とは類似して居るけれども、其の原動力は異にして居る。愛慾は生の性慾である故、其の愛も痴情、盲目慾に陷り易い。其の靈性の愛は理性をも有す。其生欲の愛は禽獸尙愛情あり。例へば鷄の其雛子を愛し、猫や犬も同じく其の子を愛す。

靈性に基く愛は其の間に靈的同情の相通あり。和氣あり。眞實あり。光明あり。調和あり。潔白歡喜あり。其間に永遠不可離の因緣を以て相愛す。

夫は此同一生命が一切の個々と分現するものなれば、靈我の中に一體の觀あり。此の一體觀の心靈に於て一體なるを自覺す。

人生の目的觀

人生の歸趣、即ち人生の目的は先に述べし動機より云はゞ、自己の奥底の伏能を開發して自我實現的に道德的行爲を爲す。各自の人生の目的觀は、個人として言はゞ、各自己の目的觀念、必ずしも同一にて勿らん、何んとなれば人は其の理想とする處、其の希望する所、其の性相相同じからず。依て人生の目的觀も隨つて其の趣きを異にしてゐると思ふ。然れども最高等に進んで、其の心靈開發し、靈的生活に入りし人は

自から必然的に一致することあらん。然れども其の意識の階級に從つて、人生の目的必ずしも同じからざるべし。各自己は何んの爲めに生れ來り、己が終局目的は、那邊に在るかとの自問自答を試みよ。

各自の觀念に於て目的觀の高尙なるものは人格も隨つて高等なるが如し。唯だ人生の肉體生活のみ、肉の生命營養生殖のみ是目的とする如くんば、如何に珍膳美肴奢侈の生活を營むも、狡猾なる動物に過ぎざるべし。併し乍ら人類も亦生物である。故に其の自餘の一切の生物、即ち動物や植物も共に共同の生活なるの點と、又人類は他の生物と特別なる處とあり。其の生活の階級區別して人類の特殊點を明さんか、

生活三階

凡そ天覆ひ地載せ、地上に起伏生滅せる生物を三類に分つ。一に植物生活、二に動物生活、三に精神生活、之なり。

地上に生活する三階を通じて、二つの職分を有つて居る。一に營養、二に生殖、之なり、甲は自家保存の爲に、乙は種族保存を目的とす。

草木の植物、禽獸の動物、人類も、皆食物の營養分を採つて、自分の生命を保存し其の子を殖して、種族を存續して行くのは共通である。若し唯だ營養を以て、自家保存するのみが目的ならば、最高等に進みたる大杉古松の如き、居ながら地中より養分を採つて、立派な體格を備へ、而も何百何千年の生命を保存し、其の生殖と言はゞ年毎に何千、萬の種子を造つて、其の種族を保存して居る。夫等の前には人類は迚も及ぶこと能はず。

次に動物生活に至つては如何。高等に進みたる獅子や虎の如きは、最も立派な身體を有て、而して日々何十斤でふ肉を嚙ひ、衣服と言はゞ、天然毛衣を着て、料理を要せずして、消化する消化器機備はり、裁縫を爲さずして寒暑を凌ぐの裘を着す。唯だ營養、生殖是目的とせば、人類何をか萬物の靈長と誇るべきあらん。

然れども、人類は精神生活に於て、彼等を超越して、天より特寵を被むるの光榮あ

り。人類は精神生活。實に人類は右高等動物に對して孤弱であるが、人は智力と云ひ感情、意志等總ての點に於て發展して最高等と云ふ位置に在り。然し乍ら生命、皆精神の力ありとすれば、動物植物も亦何等か精神生命は有りながら、其の精神の發達の程度に於て、天地霄ならぬ懸隔がある。更に他の動物と人類との精神を共通と特殊との有ることを區別して其の階級を明さん。

精神三階

人類も他の動物と共に生物である。精神生活に於ても動物共通の點と、人間特殊的なる點とを有つてゐる。

佛教に人の心を四位に區分して動物共通性と人類特殊性とを明して居る。

四位とは、一に肉團心、二に緣慮心、三に集起心、四に眞實心である。

肉團心とは、人の精神を腦髓神經等の生理學、解剖學的に說明したるもの、緣慮心集起心とは、心理學や、認識哲學に研究する方から精神を見たので、眞實心とは、吾人一切人類の心性は宇宙の本源自性天眞絕對大心靈體と一體不二なるの眞心である。其の心を發見すれば即ち佛である。大悟徹底と云ふは、肉團心にも非ず、又緣慮心や集起心を發見するにも非ず。自性の本源、宇宙一體の眞心を發見したる處に在り。此心四位は略して精神の階級を三階に立て其區別を明せば、一に天性、二に理性、三に靈性。之なり。之の精神三階說は骨相學にて人の精神の宿す坐所なる頭腦を三階に分ちて示すに頭腦が全く骨相學に說く如く、三階に全く其受持を爲して居ると云ふに非ず。今暫く其の說を以て便利上精神の階級を示すに、頭腦三階とは眼官、耳官より下を天性と云ふ、眼より額の中心に至るを理性と爲し、額より上部を靈性と爲し、之を三階（下階を天性、中階を理性、上階を靈性）とす。

天性は眼の視、耳の聽、鼻の嗅、口の味、の如き五官の官能を以て精神の働を爲してゐる。此の働きに於ては、人類も動物も共通して居る。生理上缺くべからざる働

きを爲す坐所にして、理性は人類特別の心の働きにして、一切の理を斷じ、認識する智力の働にて、人にのみ具有して他の動物には有て居らぬ。上階の靈性は宗教心にして神人合一、生佛一致の心性にて是は最高等の精神である。

宗教心の發達

宗教心即ち靈的生活は肉の生活の進歩と同じく生長と發達の兩現象あり。此作用三種。

一、生長。新知識の收獲と新情意の發動。人は多く收得の中に忘却するも再また精神的財產と爲て經驗加はり內容の增加は生長、或時期に忘却、忘却と收入と平均、是身體の再新廢壞、反待勢力の平均に由て終を告ぐ。

二、組織變化、精神諸部分形狀及び整頓法の變ずる前に結合堅固ならざる觀念が密接して一體系を形成す。從來種々の異る觀念共通の點とも認めざりしに其進步に伴ひて兩觀念に共通の質を發見して一に結合するに至る。事物の概念は是の如くに形成する、種々の肉類及び穀菜等を攝取して自己の養分とし、體質を形成す。

三、機能變化。精神新作用次第に啓發せられて複雜の働きを爲す。例へば幼時記憶發動想像等を主とするも次第に思想作用盛に活動する。是發達の象なり。

精神の二面

人の精神を根底から分析すれば二面あり、佛教にて之を佛性と曰ひ他を煩惱と云ふ甲は開發し成佛し乙は解脫し靈化す。

儒教にて道心と人心と曰ひ、キリスト教にては肉の心と靈と曰ふ。また世にこれを良心と私心、また本心と氣質など、種々に名を附せらるるも、一義の異名に過ぎず。今これを甲を心靈と呼び、乙を我と呼びて、或は眞我と肉我とも云ふべく聖の職分は心靈を開發し我を解脫し靈化するにあり。言を換て云はゞ、本心を發揮し氣質を陶冶

し訓練することである。

心靈を完全に發揮し主我を解脱し靈化したるものを古來聖人君子と稱し、我のために心靈が潛伏して少しも顯動せざるものを凡愚と名づけたるのである。

天然は劣態、人は天然として即ち生れたまゝでは自然の氣質具つて有ることは、恰も粳米に糟粕が糠が被皮がありてよしや世間ではそれは上人であると云ふとも、決して全く善といふのは無い。すべて善にしても惡にしても、能く修養し熟練して開發し發達して、初めて善といふべき、顯動として、全く善が活動が出來うるのである。孔子が善柔を友とするは損なりと云は善といふも全くの善ではない、唯世の中の人は惡を働かない人を善人と見做して居る。そは惡を働かないまでのこと、善ではない。全く顯動のない善柔を友とするは決して益がないと云ふことなり。

心靈の覺醒

佛陀成道の後ネハンを得るの道を教へ給へり。ネハンとは、罪惡の我を脱し生死の苦を離れ、如來の永恒の靈界即ち報身如來の光明中に攝取せらるゝ義なり。人が教に隨づて信心開發し心靈更生する時は、肉體を有ちながら精神は聖域に栖みあそぶ、最福なる生活をうる。身終る時は實在に常寂世界に到る。

釋尊八十にしてクシナなる鶴林にわかれを告るに先だちて曰く、「我眞實の法身は寂光界の無量壽如來、永恒不滅自由と光榮を以て充されたり。我を戀念せば、如來アミダに歸してその淨土を欣へ」と。

彌陀は實は久遠劫來我等が心靈の大慈父、一たび分れて已來、久遠劫來我が愚かなる、**ミオヤ**の在ますとも覺らず世養はれたりとも聞かざりしを、今は釋迦牟尼佛として分身を表はして**ミオヤ**の在ますことを知し給ふ。

佛陀、前の菩薩の因圓に果成るを佛陀と名づく。

法身報身應身の三身あり。此世に出て釋尊として人格の身を以て人類を教化度脱したまひしは應身と云ひ、最高等の清き處に在して相好圓滿の身、光明遍く十方を照して一切の人類を攝取し靈化したまふが報身と云ひ、天地萬物の實體として一大精神態にして萬物現出する本源なるは法身である。佛陀は人類に對しては人の身なれども內面は宇宙の內面と一體で在ませり。

勸結、一心の發現たる十界の中にして無明態覺醒せざるものは六凡にして冥々として流轉し、心靈覺醒したるものは聖者にて宇宙心と冥合して涅槃界に安立し、前三聖は覺醒したるも未だ圓滿ではない。獨り佛陀のみ全く宇宙と同一體にして一方には極樂に安住してまた一面は分身を以て世界に出て度脱の作用をなすのである。

宗教の眞理は何の點にあるやと云へば、各自の精神と其本源なる宇宙精神との調和するにあり。自己が小天地の小我とすれば宇宙は大我である。此大我と小我が融合して、大我の目的を我目的として、眞理の終局に進むべき力行をなすが宗教の目的である。其大我の眞面目を悟りしが即ち教祖釋尊である。否悟りしのみにあらで全く大我の化現である。

釋尊は其大我をアミダと號すと曰へり。譯すれば、無量の光と永恒の壽の義即ち宇宙の眞體にしてまた一切心靈を開發し靈化するの靈能なり。

問云何なる法を以て、大我小我の調和を得べきや。答へて。佛教に其方法多しと雖も、最も簡易にして完全に調和をうるは佛陀三昧なり。佛陀三昧とは、大我なるアミダの聖名によりて其聖旨の我に現はれんことを祈るとき、如來の靈應が自己の心靈に感じ、この一點の靈光によりて心靈の覺醒となる。心靈開發すれば自己の心は全く如來の天眞自性の中なることを悟る。進んでは如來の內容なる金銀摩尼寶珠の宮殿七寶

の荘嚴に、最も威嚴巍々たる相好の如來に、神聖正義智慧慈悲等の萬德を以て儼臨し給ふことを啓示さるゝ。爰に至つて始めて完全なる宗教の關係を成したりと云ふ。

かゝる眞理を得てよりは宇宙の心を我心とし、宇宙の眞理に參與りて得たる眞理を實踐躬行するが宗教の本旨にて、而も宇宙の目的に加はつたのである。

教祖は、自から如來の光明に、佛知見を開き給へり、如來の中の有ゆる眞理を知見し給ふ、靈界の太陽、明々たる界にありて、すべての人々を導くに、佛知見の眼を開きて、如來の中に、眞理に契ふ人と爲べき道を教へ給へり。

我等今無明に盲たる徒なり。教祖の導きにより、念佛三昧によりて心眼開くとき、日出でて乾坤一時に明かるきが如く、如來の日光輝ける時、一切の佛法は現前すべし。

× × × × × ×

名號のときわけとすゝめ

彌陀とは梵語にて無量と無量壽と譯して即眞の光にて心を照して明かに道をしらしめ心の垢を除き神聖同化し眞の生命として生活々動せしむる德を有せる至尊の儀にして最高等なる宗教客體の名稱であります。

今正に御勸め申す事は、諸彦よ、毎朝必ず朝日に向つて至心に眞心を捧げて十たび南無阿彌陀佛と聖名を崇めて救攝を祈禱なされよ。

信仰のすゝめ

毛利元就公は本安藝の人にして、智勇兼備の名將にて、布衣より出て、志を立て、つひに山陽山陰十三州を併有し、大に威を輝かしたのです。今周防の豐榮神社とて別格官幣社に祀られて座す。大功を立てたる公は偉大の人物ですから、精神に確乎不拔

の信仰を有て居らしたので、心の奥に光を放つ神尊が實在したのです。公は今生後生共に精神を彌陀に依托て、動かぬ堅固なる信仰にて、十一歳の時より老年に至る迄、毎日念佛して祈禱し、終身廢止ませぬは完全な勤行です。公は獨り自ら信じた計りでなく、其子孫等にも三人も之を行へかしと傳へられましたのです。尤も公の御先祖は代々能く佛を信じたので、就中大江音人匡房兩公の如きは篤く信仰されたので、匡房公は念佛者の傳を著されました。公の如き偉大な方は念佛を無上の尊きものとして信仰なされしに、世間に念佛は不吉などと謂ふ者は、動物同容な心で、了らぬ故です。野蠻人が金剛石の光を放つが氣味惡いとて嫌ふのと同轍です。有智者よ、禽獸同容な物に嗤はれぬやうに、全く國家に大功ある公を模範として、眞の光なる念佛を稱へなされ。

世の婦人衆よ。信仰に就ては公の母公を御手本となされ。母堂は十一歳なる公を伴れて、念佛の大事を稟承させましたのは、深遠な思想では有ませぬか。世の幼年青年には未だ宗教は要らぬと謂ふ樣な淺劣ましい愚姉とは雲泥の懸隔でせう。見賢は思齊たい。

青年衆よ。君等は偉大の人物の成功の上ばかりを聞いて、未だ其の偉人等の精神には確乎たる信仰が有たことを聞かぬでせう。夫は丁度汽車の運轉するの計りを見て、蒸氣力を發す原を知らぬ樣なのです。其の原動たる基礎たる精神の安心は要らぬ物として、唯虚名を貪り氣に驅られて爲す事では、實際國家の爲になるべき功はなりませぬ。人は眞に國のためとか亦人類の爲とかに最深の望を發す時は、此宇宙の源底たる至尊に對して自ら內心に依托心が發るのです。其道理です。國家のためか人類のためとかに志あれば、此國家人類宇宙の根底なる至尊に依屬心より起らざれば、根のなき樹の如くで、眞の實が結ぶべきわけがないのですから、往昔の大人等は大概信仰がありました。文家では菅原道實、大江音人、同匡房の如く武家では源滿仲、賴義家、平重盛、楠正成、同正行、德川家康、上杉謙信の類何れも佛を深く信じ

て確かに安心決定した方々です。

諸君よ。然らば偉人の如く信仰したなら皆大功を成すと云ふわけでは有りませぬ。其人の運命は人々別々なれども精神に信仰があり安心決定あらば、精神が確乎として巖石の上に家を建る樣なので、其分相應に修身齊家治國の爲にも殆くない金剛の意志なり、精神に眞の德が得らるるのであります。眞實に毎朝行ひなされかしと謹んで御すゝめ申します。

毛利元就公子息等に念佛大事を傳授の狀

一、我等十一の年土居に候間、井上古河内守所へ客僧一人來り候て念佛の大事を受候とて催し候。然る間大方殿御出にて御保ち候。我等も同前に十一歳傳授せられて是も當年の今に至るまで毎朝多分祈候。此儀は朝日を拜み申して、念佛十返づゝ稱へ候へば、後生の儀は申すに及ばず、今生の祈禱此事たるべき由受候間、又我〳〵故實に今生の願をも御日に申しもし〳〵かやうの事一身の守と成候やと餘りの事に心得候。左候間御三人の事も毎朝是を御行ひ候へかしと存候。日月いづれも同前たるべく候。

元就

同受書

一、御土居にて御日を拜書候事御傳へ成させ被るの通り誠に前々も仰聞けられ候三人儀も拜申候て然るべきの由仰せ下され誠に其望傳申度候御意を得べく候

十一月廿六日　　隆元
元春
隆景

弘法大師

大師が御身を碎きて法を弘めたる本意は、闇と惱の衆生を救ふ處の如來の光を敎へ

給ひしなり。如來の光を外にして信仰は即ち迷信と妄信である。そは大師の御意にあらず。

大師の御德を慕ふ信者よ。大師の敎に本づき如來の光によりて淸き人と成り光の生活を得るやう、また後の世は大師の在ます光明の聖國に生るゝ事を祈り給へよ。

弘法大師念佛口傳集

南無阿彌陀佛といふは天竺の語なり。こゝにては歸命無量壽覺といふ。壽量りなき佛と訓むなり。又南無は歸命の言ば、歸命とは命にしたがふなり。亦發願回向の義なり。阿彌陀とは空假中の三諦、法報應の三身なり。般若解脫法身の三德、三佛性、三菩提なり。又阿字本不生の意を阿彌陀となづく。佛とは覺とて、さとると訓む故に、善導は歸命無量壽覺と釋し給へり。空海私に云、六字の名號は華嚴經六十卷は南の字大品經不動經大集經は無の字、涅槃經四十卷、法華經八卷二十八品六萬九千三百十餘字は阿の字、大般若經六百卷の諸法は彌の字、八萬の聖敎一切諸佛菩薩は陀の字也故に南無阿彌陀佛なり。又法華經といふは如意寶珠を中に納むる時如意寶珠の六角を攝る六字の名號の形なり。故に七珍萬寶を出す玉なり。六字の內に納むる處の經法は具に二千三百九十五卷の大乘經六百八十卷の小乘經五百十五卷の大乘律、四百四十一卷の小乘律、五百十五卷の大乘論、六百九十五卷の小乘論、五百九十三卷の賢聖集等の決門を名號の中に納まれり。又金剛界一千四百五尊、胎藏界五百三尊、悉地七百十三尊、總じて顯密の法納まれり。又如來の六度萬行、諸佛內證（智慧慈悲）外用（神通說法）の功德、恒沙の法門、總じて一切諸波羅密、皆悉名號の中に納まれり。故に經に云、阿字十方三世佛、彌字一切諸菩薩、陀字八萬諸敎、無量無邊の功德集る故に阿彌陀といふ。又阿字は過去の千佛、彌字は現在の千佛、陀字は未來の千佛、故に南無阿彌陀佛と一度唱ふれば三世の諸佛の御名を稱ふるなり。觀經に阿彌陀如來を諸佛如來是法界身、入一切衆生心想中と說けり。一切佛菩薩の光明、說法利益、大慈、大悲、萬行圓滿を備へ給ふ功德を彌陀一佛に納まるなり。故に諸如來とは名づけ

奉る。十方三世の諸佛の福德智慧慈悲神通を具足したまふ。故に大經の論に歸命盡十方無礙光となづく。故に阿彌陀佛とは一切三寶と釋し給ふ。又十二の異名ましまします。

無量光佛　無邊光佛　無礙光佛　無對光佛
燄王光佛　清淨光佛　歡喜光佛　智慧光佛
不斷光佛　難思光佛　無稱光佛　超日月光佛

彌陀一佛の名號也。總じて阿彌陀光明は七百五倶胝六百萬の光あり。また觀經には光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨と說き給ふ。此光の中に念佛の衆生を攝取して捨給はず。又萬德恒沙の法門無遍の功德ましまします。故に阿彌陀佛を無量壽覺と名け奉る。平等覺經にエンブダ金を以て高さ十丈の佛を一萬體作り十度供養し奉るより念佛一遍の功德は今尙勝れたりと說けり。淨（　）經に云、三萬恒沙の金の塔を立て供養するよりも念佛一遍の功德なほ勝れたりと。阿彌陀思惟經に、轉輪王の命ちの長きこと千萬歲、其間四天下に滿ちたらん金銀七寶を以て、日々に十方の諸佛を供養し奉るよりも、念佛一聲の功德尙勝れりと說給へりと。稱讃淨土經に云、百千倶胝那由他の舌を以て一々の舌のさきにて無量劫の間說くとも念佛一聲の功德をば說き盡すべからずと說き給へり。般舟三昧經に云、たとへば時々に風吹きて行くこと百年吹きたらんよりも、其分遠からんこと東西南北を入物にして金銀七寶をつみて諸佛に供養し奉らんよりも、念佛一聲の功德なほ勝れたり。又佛の曰く、人の身の毛を一筋拔きて百分にきりて、九十九をば殘して、いま殘る一毛を大海にひたしたる水のほどよりも、十方三世の諸佛の說給へるはすくなく殘る所の功德は大海の水の如しといへり。かの不思議すぐるゝが故に名號不思議となづくと。又云、一度南無阿彌陀佛と念じ奉れば即無量の罪消えて、今生にたのしみを得、後生には淨土に往生すと說給へり。これを唱ふるに、行住坐臥時處所緣を嫌はず、持戒破戒も擇ばず、常住常恒に攝取し給へり。十人は十人ながら百人は百人ながら共に往生する疑なし。

稱名の外には決定往生の業なし。

稱名の外には決定往生の三心なし。
稱名の外には決定往生の功德なし。
稱名の外には決定往生の正法なし。
稱名の外には決定往生の菩提なし。
稱名の外には厭離穢土欣求淨土の心なし。
稱名の外には決定往生の來迎なし。
稱名の外には往生の攝取不捨なし。
稱名の外には決定往生の佛なし。

念佛の行者をほめていはく、若し能く念佛唱ふれば人中の好人なり、人中の最勝人也。人中のフンダリ華なり。人中に超過せり。此宗は他力本願の名號なる故に仰てもあふぐべし、敬ひても敬ふべしと說給ふ。相構て、稱するを聞ても誹謗することあるべからず。若しそしりを爲す人は無間地獄に落つべし。能々心得べきなり、不信の人には見すべからず。あな賢。

佛說阿彌陀經開題　（弘法大師）

まさに此經を釋せんとするに大意等の三門あるべし。先、大意とは今此經は濁世末代の具足無問自說の船筏なり。叩水鳥樹林の莊嚴を聞くときは欣求の望み先づ進み聖衆來迎の儀式を思へば臨終の心且靜なり。

小因成じ難し七日不亂の稱名是濃やかに。
疑心長く絕つ六方三千の長舌の證誠に於てをや。

難信難解の妄霧已に晴れて易往易行の皎月是れ朗かなるものなり。

次に題目とは、佛は娑婆大恩敎主の說、梵音八種の震雷、阿彌陀とは極樂の敎主諸敎所讃の體、經とは聖敎の都名なり。（斷絕）

宗教の意義

宗教の意義とふものは、宇宙に唯一なる絶對的偉大なる神の力と、衆生の信心との投合一致する處にあり。

人間には生死の苦惱あり。この苦の源因は人々罪惡の源なる煩惱を具して、罪惡の薪あるが故に、生死の苦惱の火は盡ることなし。靈のことにつきては無明にて、自ら生の從來する處を知らず。死して趣く所を知らず。冥より冥にさまよふ凡夫にて、然らばこれが苦の解脱を求めんには、絶對的偉大なる力を有する如來に歸命信賴するの外に途なし。

宗教は人生の冥を照す光明、また人類を苦惱より救ひ出す力。

人は人生無明の中に生れ、冥より冥に入り、自ら生の從來する處を知らず。死の趣向する處を知らず。

此心の無明なる人生に對して、一道の光明を與ふるものは眞の宗教なり。人生苦惱多し。人生八十年の旅路に悲慘の苦悶多し。こゝに於てか大なる安慰を與ふるは即ち如來の大慈悲なり。

人には肉慾我慾等の意志に自分勝手なる惡質ありて、煩惱の爲に罪惡を作り、人格を墮落せしむ。

人の惡質を脱却して聖靈態に意志を靈化せしむるものは如來の光なり。

宗教とは一言に言はゞ、絶對的偉大なる如來の光明と、衆生心との投合一致し、衆生の心を無明と罪惡と苦惱とより救靈して光明の中の聖き生活を得せしむるものなり

宗教的關係

主體——人の信仰
客體——如來光明
形式合一　内容融化

主體人心
- 煩惱——解脱靈化——（煩惱自ら脱却せず、光明を待つて解脱すれば、必ず靈化す。）——宗教の要
- 佛性——開發顯示——（靈性獨り開發せず、光明を待つて光明を得れば必開發す。）——宗教の能

如來光
- 清淨
  - 美化
  - 感覺
  - 歡喜
  - 融合
  - 穢染
  - 感情
  - 憂苦
  - 智慧
  - 啓示
  - 智力
  - 無明
  - 不斷
  - 靈化
  - 意志
  - 罪惡
- 人の心
- 清淨光（感覺）

五根過失
- 先天——天然非靈——五欲——本能遺傳性
- 後天——習慣——需要——病的惡弊症

五根各五位
- 鼻
- 耳
- 眼
- 舌
- 身
- 肉（人）
- 天（天）
- 自然界
- 法（菩薩）
- 慧（二乘及空知菩薩）
- 佛（佛）
- 心靈界

五根二用
- 惡——惡道墮落門
- 善——善意
- 歡喜光（人の感情に對して拔苦與樂の功能）

人生觀

天然の人

身——美感の器と想ひ——（本來不淨なるもの）——（如來の聖旨に仕ふる器。働くに例へば働くな目的として美否を論ぜず）

受——世は幸福を與ふ機と想ひ——（苦なるもの）——（垢質を脱する契機としての苦、勤苦によりて靈福を感ず）

心——轉變定りなきものを認て自ら親みとなるものと想ふ——（無常なるもの）——（自己の頼み難きを覺るは常住不變の如來に依屬して不斷の向上をなす）

法——天則は自分勝手になるものでないのに然かも自分の自由を得るものと想ふ——（自由ならぬもの）——（自然の縛を脱して大義の自由を求む）

小乘の人

苦惱と罪惡との苦悶は恩寵要求の動機

二種求道動機
- 自己苦惱觀
- 自己罪惡觀

感情信仰
- 歸命
- 融合
- 安立

光中の眞心妙樂
- 法喜
- 禪悅

歡喜光の五
- 人事……（人間）
- 天眞……（天界）
- 超自然的……（二乘）
- 他受用法樂（菩薩）
- 自受用法樂……（佛陀）

（斷絶）

昭和三年一月廿八日印刷
同　廿九日發行
誌代年七冊壹圓貳拾錢（郵稅共）
年拾貳冊　貳圓（郵稅共）
編輯兼發行人　山崎辨成
東京市小石川區茗荷谷町九八
印刷人　小林七太郎　電話小石川一四九五
東京市小石川區水道端二ノ四四
發行所　ミオヤのひかり社　振替東京六六八五一番